

中世の位相と位相語

——社会学的語彙論の立場から——

島 田 勇 雄

要 旨

Alvin Toffler の「The Third Wave」によれば、人類は、今地球規模の第三波を体験しつつある。その三波はそれぞれ、長期にわたって地球規模に実現されたもので、我が国の歴史的体験は種々記録されてあるべく、それを語彙史的に追体験しうる可能性やいかんというのが私に与えられた命題である。私はそれを構造機能主義のパースンズ流社会学派やシュツツの現象学的社会学派、目下風靡する先端技術のシステム論を背景に、語彙論体系を構築し、中世の農村村落語彙を媒介にして対応しようと予定する。いずれの社会も集団員の集合によって構築され、その集団員の社会的行為によって保持されるとの構造原理において同一性を持つ。これは位相幾何学の同相に類比され、社会構造の基本的原理と考えられ、それは語彙論の基本的原理とも考えられ、語彙論の基本的骨格は社会の大小にかかわらずぬと考える。集団員の構成を「地位」(身分)、その社会的行為を「役割」とする。中世の荘園資料を分析するに、荘民(農民)の地位に関する表現の多彩性に一驚する。すでに農民の制度上の地位は確定し、「惣」「一揆」等を経てその制度上の身分は強乎に確立されてあると思われるのに、なぜその一般生活

上の称呼がそのように不安定なのであろうか。それは一般生活的な農民生活自体の不安定要素に由来するものと考えられる。

既述の如く、中世は社会、経済、社会構造等の点で不安定要素が強く、生産技術その他で大変革期に当たっていた。それらが社会的環境の動揺をもたらし、それが庶民的視座のゆらぎの因となり、多くの生活関連語彙のゆらぎの因となったと考えられる。西歐中世の大航海時代における動揺の、東洋における共鳴現象として庶民の位相語に生じたものは右の如くであると考えられる。

(一・一) はしがき

いま日本は、公的な国家レベルではサミットやガット等にかかわる論難に曝され、私企業的レベルではNTTや国鉄・製鉄・造船の如き重厚長大型企業の解体等による生活関連の諸問題をハイテク時代の国際化対策として対応を迫られつつある。そのような社会的環境に対応して世はまさに微妙に変換しつつあり、それにそなえて誰しもが微妙に心構え・身構えをゆるがせつつある。たとえば筆者の居住空間としての神戸市では、基幹産業としての造船製鉄業の衰退により住居に近接する住吉川沿いの広大な社宅地域からは住民が去

つて灯火の影は無くなり、その清流沿いからは物語る若き男女の姿が消滅して、かつての河水をたぎらせたみずみずしさは霧消してしまつたし、それらに合わせて市当局者たちは迫り来るゴーストタウン化の危機の脱出の模索のために各種事業化に奔走し、神戸市K・Kとの評価を得るほどの多くの成果を得ている。もつとも、そのこととの余りに、人口造成島と「カミヤ住吉駅との連絡線を計画し、谷崎の旧居倚松庵や『さかめ細雪』の洪水場面の原因河川としての故地景勝の破壊を実現しつつあり、もつて我々の抵抗をさそいつつある。右述は私ごとながら目下の国際化時代における筆者の位相的現実である。即ち、それを契機として、現代的問題意識から過去へ回帰する方途を考慮する、というのが私に与えられた頭書の如き命題なわけである。

末来学者A・トフラーに依れば、その種の国際化の波を人類は三度体験しているところある（『第三の波』中公文庫）。その第一波は一万年ほど前の狩猟採集時代の農業革命のことで、それによつて人類は栽培農業による定集農業を獲得したし（中尾佐助「栽培植物と農耕の起源」一九六六岩波新書）、（飯沼二郎「日本の古代農業革命」一九八〇筑摩書房）、その第二波は産業革命による大企業の到来で、それによつて人類は先端企業による文明文化の恩恵を享受した。第三波は現代のハイテク社会におけるもので、第二波の大企業はゾクゾク解体を迫られ、それらはトフラー命名の「フューチャー未来適応産業」への改編を迫られ、多数の関連者は未経験な未来適応生活の模索に難行苦行中である。ところで、この三波に伴う動揺は本質的に地球規模なもので地球のすみずみまで長期間にわたつて浸透するとトフラーは述べる。そうすれば、欧州における大航海時代に始る胎動はわが中世に共鳴を生じていてもよさそうに思われる。もしそうなら我々の語彙論の中で

対抗措置を言うことも許されるのではなからうか。それを語彙論的感性装置にしてもよいのではあるまいか。それを言語によるコミュニケーション交信の最も先端的媒体としての語彙論特性の一としたいのである。私はそれを中世の農業語彙を契機に模索してみようと考えているわけである。

(一・二) 右述の如く古典を考察の対象として使用する際の留意事項の第一は、対象とする資料の性質を考究するのを専らとする字であり、それに書誌学・文献学・古文書学などと呼ばれるものがあり、それぞれ若干特性とするものに差違があると考えられる。書誌学は書物の形態等外形的説明に重点を置き、文献学・古文書学は形態等のほかに言語・文章等の内容的考察に合わせて重点を置くことと解される。また文献学は歴史書・文学作品の如く内容量の大きい対象に、古文書学は感状等の小容量の断片的文書に多く適用される。また同時代の書物でも、その形態が写本・活字体（日本語・ローマ字）のいずれであるかによつて留意事項を異にする。私は西鶴本を中心とする近世の版本について若干経験があり、発見するところもある（『日本語学』一九八六・五月号「近世語の世界」を参照されたい）。近世の版本では版下書きがあり、ローマ字本では植字工がいて、作者の草稿を若干操作したことがあると考えられる。従つて、『好色一代男』は一字一句原作者西鶴の表現どおりである、との森銃三氏の論に従うわけには行かないというのが私の文献学的考究の結論である。同様のことがシェークスピアの全集の初版本の植字者の本文操作についても知られており、英語学者山本忠雄博士がかつて私の結論をそれとの対比で語られたことがあつた。同様の現象をキリシタン物のローマ字表記について類推できる。また、芥川作品の如きでは、そ

の作品の雑誌における初出の校正洩れが単行本における収録の際に引き継がれ、更に全集本に同様に引き継がれて残存するものがある。そのようにして本来芥川の用語でない語彙が全集に残存することになったものがあるわけである。活字本の文献学的研究はそのようなことに備えてなされなければならぬのである。

(一・三) ところで、位相とは位相幾何学の用語である。国語学の「位相」や「位相論」は菊沢季生氏の論から始まったものであるが〔国語科学講座〕明治書院、数学者京大教授森毅氏の「位相用語集」の解説等より私は次のように理解する(「位相のころ」日本評論社)。多数の物的個体の集合によつて各種の形態の得られた場合、その形態を「位相・位相空間」と呼び、それをもたらず概念連関を、「順序位相・距離空間」等々呼称し、その言語を位相語と呼ぶ。その概念連関は数学、国語学等に用いられる。国語学は人的個体の集合によつて作られる各種交信コミュニケーションの場を「位相」と呼び、その各種社会集団の言語的交信に用いられる言語を位相語と呼ぶ。その人的集合としての社会集団は歴史的に職種・文化等における特性を発達させており、その体系的処理を語彙論の主たる対象とすると考えられる。

その語彙の歴史的記述に当たる語彙的事象の体系的記述に当たる語彙史的部面においては、全ての個体に対する政治的支配関係とその個体の日常生活を外顕せしめる生活様式関係とを包含せしめる配慮が必要であると考ええる。前者はマルクス主義的史的唯物論であり、後者は現象学的社会学の方法論である。ともに我われの日常生活にとつて根幹的な社会現象であると考えられるからである。

参考文献(入手可能なもの中心)

- (一・一) 石母田正『古代末期政治史序説』(一九六四年、未來社)・松本新八郎『中世の社会と思想』上下(一九八三・一九八五、校倉書房)・安良城盛昭『日本封建成立史』上(一九八四、岩波書店)・同『幕藩体制社会、成立と構造』(一九五九、御茶の水書房)・同『大閤検地と石高制』(一九六八、日本放送出版協会)・同『歴史学における理論と実証』(一九六九、同)・永原慶二『日本封建制成立過程の研究』(一九六二、岩波書店)・同『日本の中世社会』(一九六八、岩波書店)
- (一・二) 鈴木良一『中世史雑考』(一九八七、校倉書房)・藤木・井上氏編『体系日本史叢書、政治史I・山昭和四〇年、山川出版社』
- (一・三) 『講座史的唯物論と現代』(一九七七、青木書店)・鈴木氏ら編『一揆』(一九八一、東大出版会)
- (二) アルフレッド・シュッツ森川氏ら訳『現象学的社会学』(一九八〇、紀伊国屋書店)・江原由美子・山岸健『現象学的社会学』(一九八五、三和書房)・シュッツ『現象学的社会学の応用』(一九八〇、御茶の水書房)・シュッツ・パーソンズ『社会学論の構成』(一九八〇、木鐸社)・片桐雅隆『日常生活の構成とシュッツ社会学』(一九八二、新潮社)・R・C・クロント『人間と社会の現象学』(一九八四、勁草書房)・橋本和孝『生活様式の社会学論』消費の人間化を求めて(一九八七、東信堂)・津久井佐喜男『生活科学としての心理学』(一九八七、勁草書房)・ジョルジ・早坂氏監訳『現象学的心理学の系譜』(一九八一、勁草書房)・ジョルジ・早坂氏監訳『心理学の転換』(一九八五、勁草書房)・江原由美子『生活世界の社会学』(一九八五、勁草書房)・山本啓「ハーバマスの社会学論」(勁草書房)・山口節郎『社会と意味』(一九八二、勁草書房)・山岸健『日常生活の社会学』(一九七八、生活の社会学)〔日本放送出版協会〕・メルロ・ポンティ・高橋充昭訳『現象学の課題』(一九八三、せりか書房)

(二・一・あ) 語彙論

まず標題の中世に対して歴史学者がどのように対応しているかを

知って前者の轍を考えることの一端としたい。同じく史的事象を追求する学問だからである。『中世史講座』（学生社）の冒頭の「刊行にあたって」には、先年の『古代史講座』をひきついで、世界の諸地域・諸民族の歴史における「中世」を考察の対象とするものであるとする。史学界では一国の時所の実態をより広視覚の歴史的視点との相関の中で概観するのを通例とする。国語語彙史も同様の方法を採るべきである。私は中世欧州語文献には通じないけれども、欧州語についての記述の少なさから、日本中世の文献には社会言語的特性が強いと思われ、それを通じて第一に中世日本語彙史の特性をより著しく浮上できるように考えている。ところで、その中世なる概念は欧州のルネッサンス期の古代・中世・近代の三時代区分法に由来するもので、一般に中世は暗黒時代として解され、その史観はそのまま輸入されて、否定されるべき時代と考えられ、「暗黒」に政治・文化等の諸要素が代入されることが多い。そのようにして、中世は消極的には「暗黒」的な時代、積極的には変革・改革の時代と解されることが多い。そのことから諸地域・諸民族において政治・文化における土着的特徴が強く顕示され、民衆的民族なそれらの根源を中世に求めたり、中世に対する新しい関心が高まつたりしていると解説される。たとえば、網野善彦氏は前期鎌倉時代末期頃までの野蠻から以後の主として室町時代の文明への展換を説かれたり、非農業民の社会的侵出を論述されたりされている（『蒙古襲来』一九七四、小学館）（日本中世の非農業民と天皇）一九八四、岩波書店）。農業部門については、一般に前期における小規模経営の日本的集約農業の成功とか畠作の展開、畿内農業における二毛作・三毛作の存在に先進性等が多く説かれる。概して、中世については、非農業部門の展開

による社会的分業の発展が多く説かれる。

歴史学研究会・日本史研究会編集の『講座日本歴史 中世』の「しがき」には「近年の中世研究者の問題関心は」従来歴史圏外に放置されていた女性・商人・手工業者・聖・非農業民、中世民衆の生活史・技術史、中世の寺院史、中世の身分制研究等に定着したとする。そのほか日本歴史学会編『日本史研究の新視点』（一九八六、吉川弘文館）では「中世の社会と身分」「中世の対外関係」「歴史的景観の復原」「戦国大名検地論」の四命題を新視点として設定している。身分制の問題は階級斗争に関連する重要命題であり、対外交渉は標題に若干関与する命題であり、歴史的景観の復原問題は目下の神戸市の六甲アイランド線問題にも関連して現実的に我われの斗争問題として生かされており、検地論は封建制成立に関与する重要命題である。

その他管見によれば、諸氏によって前期における小規模な日本的集約農業の成功が後期における各種社会的分業展開を導いたとか、畠作の発展により畿内先進地区に二毛作、時には三毛作をもたらしたと説かれるが、中世の産業の基幹はここにあったと考えられる。その基盤の上に後期（室町期）には各種社会的分業の展開、都市の発展等が見られたと思われる。貨幣経済の発達に伴い、租税の銭納性、給与の買高性、銭貨の撰銭令、一国平均役としての段銭の賦課等が新しく浮上した中世経済史上の問題点であったし、為政者に対する抵抗として、各種一揆・惣・徳政要求などの生じたり、王朝政権体制と武家政権体制との補完的政治的二重構造を維持したりしたのも中世的政治特性である。私は、海民・工人等の展開した社会的分業に対し、農村社会の複合構造社会の中で半独立的に生じした

用水社会の如きを社会的分化と考えることにしている。いずれにせよ中世は過程的半独立的な社会現象を多く含みきわめて曖昧混沌として庶民生活と共に動揺するゆらぎ現象の著しいの特性とすると考えられる。それらを截然と弁別し、しかもその中世をトータルに把握することが中世史において要請されている。そのことは中世語彙史についても同様であるはずである。私が日常生活的環境の導入を方法的に考慮したのは主としてそのためである。

(二・2・あ) 語彙論の内部構造をどのように統合的に整理するかは、それぞれの論者の理念次第に試行され、種々の方法が可能であるが、私には二つの規準の方針がある。第一は社会学的方法への準拠ということであり、それはメタ理論的には言語はその社会学的存在形態より生起するという私の基本理念に基づく社会学言語学

の理念に伴立するものである。社会学言語学論者の「社会」には種々あり、単に人間集団を留意する程のものから種々の変異^{ヴァリエーション}が見られるが、私の場合はかなり社会学ドップリ型で、それも近代社会学四巨人と言われるものうち、現代アメリカ社会学の開拓者と言われるパーソンの流れを中心とし、更に同じく現代アメリカの現象学的社会学派開拓者シュッツの所論(エスノメソドロジーを含めて)をも参看しようというものである。もちろんパーソンの理論そのものは難解であり、その他も同様で、いづれも非専門者の理解を越えることが多いが、パーソンの直接的指導を受けられたという富永健一教授の諸著に委細を依拠することにしよと考える。なお、語彙論の内部構造の第二は、近時盛大化したシステム理論による。その論者に種々あり、それぞれ諸旨に変異があるが、私は伊藤重行氏の論に主として随行しようと考えている。

参考文献(入手容易書中心)

(二・2・あ・ア) 新・三沢編『現代アメリカの社会学理論』(一九八八、恒生社厚生園)・高城和義『現代アメリカ社会とパーソンズ』(一九八八、日本評論社)・高城和義『パーソンズの理論体系』(一九八六、日本評論社)・田野崎昭夫『パーソンズの社会学理論』(一九七五、誠信書房)

(二・2・あ・イ) パーソンズ・稲上厚東訳『社会的行為の構造』(一九七六、木鐸社)・佐藤勉訳『社会体系論』(青木書店)・永井ら訳『行為の総合理論をめざして』(一九六〇、日本評論社)・倉田和四生『社会学システム概論』(一九八四、晃洋書房)・武田良三監訳『社会構造とパーソナリティ』(一九七三、新泉社)・矢沢修次郎訳『社会類型—進化と比較』(一九七一、至誠堂)・新明正道『政治と社会構造』二冊(一九七三、誠信書房)・井門富二夫『近代社会の体系』(一九七七、至誠堂)・橋爪貞雄監訳『核家族と子供の社会化』上下(一九七〇・一九七一、黎明書房)・佐藤嘉一訳『社会学理論の構成』(木鐸社)・富永健一『経済と社会』二冊(一九五八・一九五九、岩波書店)

(二・2・あ・ウ) 富永健一『社会学原理』(一九八八、岩波書店)・安田・富永ら編『社会行為』・『社会過程』・『社会集団』・『社会構造』・『社会変動』(講座基礎社会学)全五巻(一九八〇・一九八一、東洋経済新報)・中久郎『社会学の基礎理論』(一九八七、世界思想社)

(二・2・い) 私の語彙論の内部構造化の第二規準化は近來システム論と呼ばれて先端技術とされているものである。システム論は近來システム理論・システム哲学・システム科学・システム工学・システム思考・システム分析・一般システム論・社会システム論の名のもとにとみにニューサイエンス論として浮上している。

そのシステム論は、現代の先端技術、即ち「技術の技術」として喧伝せられ、坂本賢三氏の『先端技術のゆくえ』(一九八七、岩波新書)

によれば米英におけるシステム技術は今次の第二次世界大戦の中の戦時的必要性より生起し、英では彼のV1号2号による攻撃に対しブラケット・サーカス作戦研究チームの編成によって成果を得、米では対日戦で特殊潜航艇や特攻隊等に対応するための研究グループを編成してその対抗^{（オーストラリア）}作戦に成功した。その戦時の手法の応用を企業の運用に積極的に使用することが考慮され、豊富な情報収集のうえ統計的解析を行ない、それに基づいてシミュレーションを行なって最も効率的方法を求めることがなされるようになった。

ORは以後は方法論的用途的に若干の系統に分かれるが、数学を重用し物理学その他工学的情報を重用する点でシステム工学はORの直系的後継と言えるかもしれない。その数学的理論としては、坂本氏はA・K・アラーシの「待ち合せ理論」(待ち行列理論)、F・L・ヒッチコックの輸送問題の「線形計画法」F・W・ハリスの「在庫管理」のモデルなどの導入を挙げかつ「一般にシステムの運用について、情報収集のうえ統計的解析を行ない、数学や物理学その他の科学を応用してモデルを作り、目的と条件のもとに種々の代替案を検討してシミュレーションを行ない、有効さの尺度に照らして最適解を求める技法になったのである。作戦はその一例にしかな過ぎなく^{（サイバネティクス）}なった。」とされる。右の代替案の検討は制^{（サイバネティクス）}御の理論の展開を意味し、それによって更に一層システム論の充実を見た。

数学的手法を重視するという言葉で、右のORの直系的後継者はシステム工学であると言ってよい。これは主として工学的部門を対象とし、また生物学的研究からシステム論に発展したものにペルタランフィの一般システム論がある。これは自然、生物、社会などの広域な対象についてシステム論的思考を適用しようとするもので、

これには生物学以外から展開した論者もある。人間の社会を主たる対象として展開するものに社会システム論がある。これらの論に^{（サイバネティクス）}制^{（サイバネティクス）}御の思考法を伴う論がある。

参考文献(入手容易なもの)

- (二・2・い・ア) フォン・ベルタランフィ「一般システム理論」(一九七三・一九八三、第十一刷みず書房)・ジェラルド・M・ワインバング・松田・増田訳「一般システム思考入門」(一九七九・一九八七、紀伊国屋書店)・T・ダウニング・パウラー・中野訳「応用一般システム思考」(一九八三、紀伊国屋書店)

- (二・2・い・イ) E・ラズロー・伊藤訳「システム哲学入門」(一九八〇、産業能率大学出版局)・飯尾要「システム思考入門」(一九八六、日本評論社)・ルーマン土方監修「システム理論のパラダイム転換」(一九八三・御茶の水書房)・P・チェックランド「新しいシステムアプローチ」(一九八五、オーム社)・松田正一「システムと行動」(一九八三、泉文堂)

- (二・2・い・ウ) 北川・伊藤「システム思考の源流と発展」(一九八七、九大出版会)・松田正一「システムへの誘い」(一九八五、泉文堂)・伊藤重行「システム・ポリネティクス」(一九八七、勁草書房)

- (二・2・い・エ) レオナルドラ「サイバネティクスの世界」(一九八〇、講談社ブルーバックス)・合田周平「サイバネティクスの考え方」(一九六九、講談社・現代新書)・伊藤重「システムポリネティクス」(一九八七、勁草書房)・宇都宮敏男「生体の制御情報システム」(一九七八・一九八一、朝倉書店)・ドイッチェ・伊藤ら訳「サイバネティクスの政治理論」(一九八六、早大出版部)・今田高俊「自己組織体」(一九八六、創文社)・鈴木幸毅「現代組織論」(一九八六、税務経営協会)・今井金子「ネットワーク組織論」(一九八八、岩波書店)・今井賢一「情報ネットワーク社会」(一九八四、岩波新書)・船津衛社会学叢書「シンボリック相互作用語」(一九七六、恒生社厚生閣)・リンドスミス・ストラウスデン

ン・船津衛訳「社会心理学——シンボリック相互作用論の展開」(一九八一、恒生社厚生園)・カラット・中溝・木藤ら訳「パイオサイコロジー」(IIIII)——心理学の新しい流れ」(一九八七、サイエンス社)・リンゼイ・ノーマン「情報処理心理学入門」全三巻(同)・寺野ら「フアジイ・システム入門」(一九八七、オーム社)・菅野道夫「フアジイ制御」(一九八八、日刊工業新聞社)・フアジイ理論とその応用(水本雅晴)(一九八八、サイエンス社)

(二・2・い・オ) 古田勝久・佐野昭、大学講義シリーズ「基礎システム理論」(一九七八、コロナ社)・三浦大亮・橋本茂司「計算機科学、ソフトウェア科学講座」二・システム分析」(一九八七、共立出版株式会社)・上野晴樹「知識工学入門」(一九八五、オーム社)・大須賀節雄「知識ベース入門」(一九三二、オーム社)・須田信英、機械系大学講義シリーズ二九「制御工学」(一九八七、コロナ社)・近藤次郎「巨大システムの安全性」(一九八六、講談社ブルーバックス)・須田信英、コンピュータ制御機械シリーズ2「システムダイナミックス」(一九八八、コロナ社)・日本監査研究会ら編「情報システム監査の課題と展開」(一九八八、第一法規出版株式会社)・太田昭和編「システム監査用語辞典」(一九八八、中央経済社)

(二・2・う) 北原貞輔「システム科学入門——社会科学の発展のために」(一九八六、有斐閣)・ハーバーマス・ルーマン「批判理論と社会システム」上下(一九八四、木鐸社)・ルーマン、佐藤勉訳「社会システム理論の視座」(一九八五、木鐸社)・ルーマン「法と社会システム——社会学的啓蒙」(一九八三、新泉社)・ルーマン「社会システム論文集2」「社会システムのメタ理論——社会学的啓蒙」(一九八四、新泉社)・ルーマン「社会システムと時間論——社会学的啓蒙」(一九八六、新泉社)・有井行夫「マルクスの社会システム理論」(一九八七、有斐閣)・叢書ウニベルエタス・寿福「後期資本制社会システム——資生制民主制の諸制度」(一九八八、法政大出版局)・バックレイ「一般社会システム論」(誠信書房)・公文俊平「社会システム論——社会科学統合化の試み」(一九七八、

日本経済新聞社)・中山・間々田ら「社会システムと人間」(一九八七、福村出版KK)・ダンカン、中村秀郎・柏岡富英「シンボルと社会」(一九八三、木鐸社)・福井憲彦「時間と習俗の社会史」(一九八六、光明社)・テイラー、三隈「集団システム論」(一九七八、誠信書房)・公文ら「文明としてのイエ社会」(一九七九、中央公論社)・榎木・根本ら「新しいシステム工学入門」(一九八八、オーム社)

(二・2・え) 寺野寿郎・浅居喜代治・菅野道夫以上工学博士共編「フアジイシステム入門」(一九八七、オーム社)・水本雅晴「フアジイ理論とその応用」(一九八八、サイエンス社)・菅野道夫「フアジイ制御」(一九八八、日刊工業新聞社)・ペンワー・マンデルフロ、広中平祐監訳「フラクタル幾何学」(一九八五、日経サイエンス社)・宇敷重広「フラクタルの世界」(一九八七、日本評論社)・高安秀樹「フラクタル科学」(一九八七、朝倉書店)・高安秀樹「フラクタル」(一九八六、朝倉書店)・啄上季代絵「フラクタルCGコレクション」(一九八七、サイエンス社)・「数理科学」特集「フラクタル周辺の数理」(一九八八、九月号サイエンス社)・別冊「数理科学」形・フラクタル」(一九八六、十月)・「数理科学」特集「生成発展系」(一九八八、六月)・山口昌哉「カオスとフラクタル」(一九八六、講談社ブルーバックス)・「位相空間の道」(一九七二、同)・「新しいトポロジー」(同)・「やさしいトポロジー」(一九七四、同)・「トポロジー遊び」(同)

(三・1・あ・ア) 地位と役割

社会の構造をまずそれを構成する人的要員の「地位」とその要員の社会的機能としての「役割」との二部に分類するのは社会学において最も通例とする方法であり、わが語彙論もその社会学的原理に従って各社会、ごとの構成員に関する語群と、その「役割」に関する語群との二部に分類し、それを語彙論の根幹的構造とする。一体ど

のような社会であつても、それが人の集団によつて構築される点は全く同様であり、それはただ集団の大小にかかわりない。大なる社会は多数の集団員によつて構築され、小なる社会は少数の集団員によつて構築される。しかし、その大小・多少にかかわらず、それらが人々の集団によつて構成され、その構成員による当該社会特有の社会的行為によつて当該社会が保持されるという社会的構造原理には質的差異はなく、その点は全く不変であると言ふべきである。その構造原理は位相幾何学の同相に類比される（一九八六、近代語研究第七集、武蔵野書院参照）。

社会学者富永健一教授はこれらマクロ社会ミクロ社会を次のように分類される（『社会学原理』一九八六、岩波書店）。

(一) 全体社会（ミクロ社会）

基礎集団——家族・親族

機能集団——組織

地域集団——村落と都市

部分社会（マクロ社会）

社会階層

国民社会と国家

右の機能集団は、厳密にはアソシエーション（家族を除く）、ゲゼルシャフトと重複する点もあるが、近代産業社会段階に入つてから簇生するにいたつた集団である、とされる。職能集団の如きであると思われるが、そのうち企業集団と制度化された支配関係を備えたものを「組織」とされる。富永氏は地域社会に農村と都市を含めるが、それは通例「中規模の社会集団を基準とする」と言われる方法の特性である。富永氏の中世の農村や村落の特性は、農民は移動の自由

をほぼ持たず、また村落は「人口規模と人口密度が一般に小さく、需要供給などの社会関係が大部内部に閉鎖されており、住民が大部分一次産業（農村の場合は農業）に従事している」というような地域社会である（『社会学原理』）と規定される。それは社会学的要素を含めた一般的規程と考えられる。

中世史家は一般に史観に厳しく、その史観に基づいて時空に即して自然的政治的成立条件を述べる。それらについて中世史家（前期Ⅱ 永原慶二、後期Ⅱ 島田次郎）のまとめに即して略述する（『中世史ハンドブック』近藤出版社。前期は成立条件が多様であり、それに対立して後期は政治的統一であるとの総括である。前期には村落形態も多様で、小村Ⅱ 散在型村落（永原慶二・均等名荘園型村落・在地領主型村落・谷戸田名主型村落（以上島田次郎）などの分類がされたり、更に身分構造や性格・共同体等に関する問題も提示されている。永原慶二氏は中世前期には村落共同体は存在しない。荘園解体過程に出現する惣村の成立をもつて中世的村落共同体であるとしている（『橋論叢』）。これに対比して中村吉治氏は近代以前の社会においては共同体は不可欠なものであるという理論的前提に立つて、中世初期における共同体的社会関係を名田・名主にあるとし、いわゆる名主共同体論を主張している。その他中世前期の農村村落については多数の問題提起がなされている（『中世史ハンドブック』近藤出版社）。前期の中世村落の多様性に対比して後期のそれは政治的に統一されている点が特性として総括される。後期の特性は、まず三浦周行氏によつて周知せしめられた山城一揆の先行性にある。それは民衆自身が自主的・自治的に結集した基盤の上に成立した地方的権力であり、その先進的村落の動向は次第に各地に拡充し、畿内の公領荘

園では「惣百姓」「惣荘」などのもとに年貢の地下請・自検断を行うなど自立性を確立したり、集団抵抗の母胎となったり惣有財産を規定したり、「惣掟」を定めたりなどした。その「惣」の成因・展開経緯等には各種の解釈があるが、ことにその中心主体については島田次郎氏によれば、その底層に小農民の個別経営の自立化による村落共同体の成員化があり、更にその上層に既成の家父長的名主層の成員化があり、さらに村落上層の地主的—小領主的転化による村落支配の組織の成員化による階層的村落再編成があり、それが惣村の村落構造を構築すると解される如くである。その惣村内部の階層性の解明と土一揆などの中世農民闘争の性格の歴史的把握とは相互関連するものと思われる。

中世の荘園絵図が多数現存し、それらを中心に条理制の歴史的事情を踏まえ、更に実地検分までに及んだ歴史地理学的研究は多くの独特の成果を挙げており、その視座よりする村落研究は珍重すべきものがある。

参考文献（入手容易なもの中心）

- (三・一・あ・イ) 西岡虎之助『日本荘園絵図集成』上下（一九七六・一九七七、東京堂）・竹内理三編『荘園絵図研究』（一九八二、東京堂）・小山靖憲『中世村落と荘園絵図』（一九八七、東大出版会）・小山靖憲・佐藤和彦『絵図にみる荘園の世界』（一九八七、東大出版会）・葛川絵図研究会編『絵図のコスモロジー』（一九八八、地人書館）・池田雅美『豪族集落の研究』（一九八六、大明堂）・荘園研究会編『荘園絵図の基礎的研究』（一九七三、三一書房）・古島敏雄『山村の構造』（一九四九、日本評論社）

以上概論した諸学について総括されることは、中世の農村村落について諸学のそれぞれの追求事項はそれぞれ独自であり、他学の追求

事項についてそれぞれ補充内容を提供しており、全体的には完成事項たりうるが、それぞれ独自では完結性を持たないこと、その部分としての個々は比較の対象たりえないこと、などである。語彙史料もそのような実体であろうが、中世の農村村落の語彙として次のものが挙げられる。

私は「地位」については、①体制側（支配者側）の身分と反体制側（被支配者側）の身分に二分し、別に前者の協力者③を挙げる。たとえば、遊里においては営業者を①とし、遊客を②とするが、遊芸人の如きを①の協力者③とするなどである。中世の荘園では①②のみである。①は荘官の類、②は荘民（農民）である。この類の名称の多種が中世の特性とされる。使用資料は荘園文書のうち『大乗院寺社雑事記』（全）、『東寺百合文書』（全）と少数に過ぎないが。

①本所・荘官

⑦実検使・検使。毛使、毛見使、田所・田所荘官。

②荘民

- ⑦農夫・奉公人・本員・御百姓、④本主・名主、⑦殿原・職事。地主百姓、④公文百姓・名主百姓・三人百姓、④沙汰人・沙汰人百姓・倉本百姓・土民百姓・地下百姓・地下沙汰人・名主沙汰作人、④地下・地下人・地下古老・地下並、地下藏寄・乙名、④地下百姓・総百姓、②当作・当百姓・東作人・名市作人・本百姓・下百姓、④作人・当作人・名主作人・出作・小作・下作人・下作・下人、③作職・作職百姓、④作手・永年作手、作徳

右の①は荘園の役職担当者であり、「実検使」等は年貢減免の要求に際し、要求理由としての被害実検の視察者を言う。「毛使」は作柄の実体見分の役人の意。「田所」も同様。②③④⑤は中世史家に論述

されることが多い。その他荘民（農民）の名称の多出に驚かされる。農民を意味する「百姓」についての解説は網野善彦氏の『日本中世の民衆像』（一九八〇、岩波新書）に詳しい。氏は「中世以前の社会のなかで『百姓』といわれた人々は、決して農民だけではない。海の民も、山の民も、商工の民も、平民自身であった場合にはみな『百姓』とよばれています。……中世社会における百姓身分の実態の多様さが、」と述べて、その実態の故に拙例の如き百姓称呼の多様さ、百姓の意味内容のゆれ、弾性を導いていると解されるほどである。ただし、私には右例の中世の『百姓』はほぼ農民の意を帯びていていると思われる。それは、根幹に「莊園等所属の農民」の概念を持ち、合わせて修飾語による概念規定を並有する概念内容と思われる。即ち「公文百姓」は「公文（荘官の一種）」としての公文を兼任する荘民にして名田を持つ農業者の意であり、「名主百姓、地主百姓」の類はそれぞれ同様の関係にあることを示しており、「殿原、職事」などは上層村落人で地主階級を表わし、「沙汰人」も同様に村落内での指導階級者を示すものであろう。「地下」級は「公文」級かそれに準じる階級かであろう。「倉本百姓」は租税収納用の倉庫を所有するほどの百姓で、一時的にも莊園主に代つてその用途に応じたほどの百姓であろう。荘民はそのように莊園主に代つて多くの役職を代用したので、それに応じて多くの称呼を持つことになったと言えるし、莊園環境の変遷でそのような百姓身分の不安定要素が導かれたと考えられることができる。それらの現象は多く中世後期に現われるが、それは中世後期の村落事情が政治的に統一されていることと正反対であることを示している。政治的な意味統一の強い時に、対比的に交信素材としての生活材の交信媒材が語彙に不安定要素が強いというこ

とをそれは示唆していると言えよう。その種の語彙的状况は、生活関係とも言える経済的要素、年貢米、年貢料、借上関係等にも同様に見ることが出来る。即ち、非常に多くの生活関係の語彙において、生活的動揺の投映とも言うべき不安定要素が見られると言える。語彙機能の交信媒材性については改めて論述しなくてはならないし、その不安定性についても同様であるし、語彙の役割機能の構造性についても同様であるが、それらを含めて地位用語の多様性に代表させて、それをもつて標題の解釈の一態としたのである。

既述の如く、中世は各種システムにおいてゆらぎ現象の多い不安定期である。政治的には王朝政権と武家政権との補完的・二重構造であり、庶民の間には惣・一揆の動揺が連続した。生産技術の急上昇による社会的分業の独立が強く、それが社会構造の大きな改革をもたらした。経済的には貨幣経済の発展による経済的諸変革を導いた。そのような社会的環境の大変革が庶民の生活環境を大きくゆるがせた。それが農民（荘民）の生活的変革に連結した。

そのような庶民生活の多元的存在感に基づく庶民的視覚のゆらぎ現象が庶民的視座のゆらぎとなり、庶民の交信の媒材としての語彙の不安定要素を生起したものと考えられる。それが中世の大航海時代に始まる西欧の第二波の胎動の東洋における共鳴現象として生起したものの一端であると考えたいのである。

——元神戸大学教授——